

建設産業における ワーク・ライフ・バランス
の実現にむけて

R48 ROADMAP

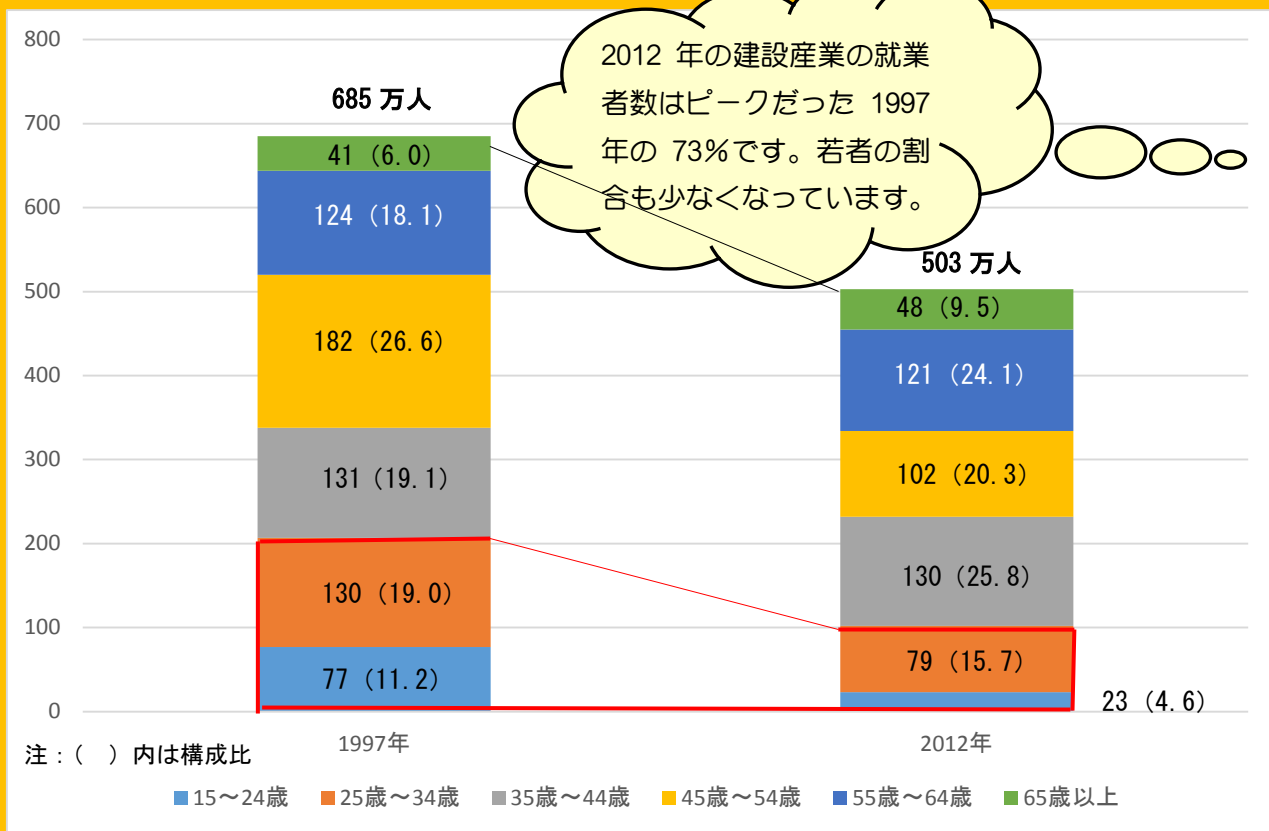
ひとつ「働き方」を変えてみよう!



カエル! ジャパン
Change! JPN

[アールよんぱち] 2014.4.11 No.19

建設産業の就業者のうち若者の割合は?



出典：総務省「労働力調査」より

統一土曜閉所

2013年11月統一土曜閉所結果 全体閉所率は46%

建築業界の魅力を考える
日本建築士会連合会
全国青年委員長会議に参加!

建設提言

コラム

休日の楽しみ
古き良きマイナー車との付き合い

次号予告

■時短推進活動 時短ダイジェスト

- 提言活動
- コラム

お知らせ

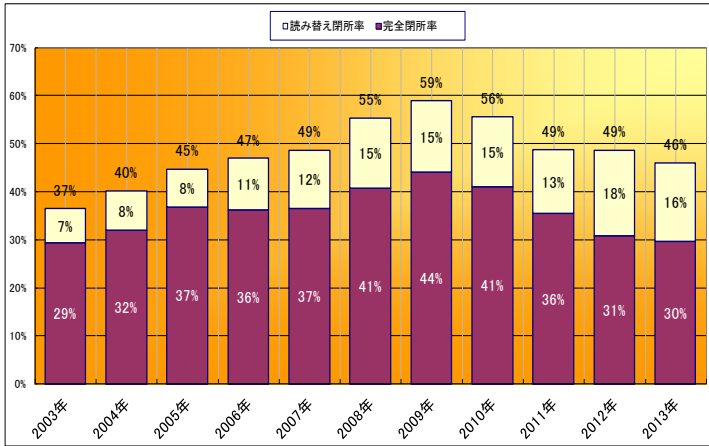
「Roadmap48」とは
建築工事の4週8休(週休2日制)での工期設定の実現や、公共工事における労働条件向上と諸課題の解決にむけた提言活動など、日建協の活動を組合員の皆さんに知っていただくための広報誌です。
①組合活動の資料として、②職場での情報交換の材料としてご活用ください。

- 次号の予定は変更する場合があります。
- この広報誌は日建協ホームページからダウンロードできます。
<http://nikkenkyo.jp>

日建協

全体閉所率は46%

(全体閉所率) ※同月推移



統 一土曜閉所の読替えを含む全体閉所率は 46% と前年同月を 3% 下回った。技能労働者を含む建設産業で働く労働者不足も大きな原因といえそうだ。

日建協は「統一土曜閉所運動ヘルメットステッカー」などのツールを活用し閉所率の向上をめざすとともに、産業全体へと広がっていくよう粘り強く取り組みを継続していく方針だ。

今後、東京オリンピック関連の工事や震災復興工事など、工事量の増加に伴い所定外労働時間の増加も懸念されるなか、健康を維持しながら厳しい状況を乗り越えていく体制づくりが重要になる。建設産業の社会的な役割に期待すると同時に、日建協が取り組む統一土曜閉所運動が建設産業で働く全ての人の「心と体の健康」を守り、土曜日が休める魅力的な産業となることを切に願う。

コラム

休日の楽しみ



大豊建設労働組合
山口 好幸さん

現 古き良きマイナー車との付き合い

在、日本では老若男女問わずマラソンブームです。しかし、興味の無い人からすれば、何であんなにキツイことをしているのか不思議に思うのではないのでしょうか。私もマラソン大会に何度か出場したことがあります。途中までは「何で参加費を払ってまでこんな事をしなければならないのか」と思いますが、完走後はまた走りたと思います。

今回紹介する私の趣味である「クルマ」とのかかわり方はマラソンと似ていると感じます。私は大学時代の先輩の影響でクルマ好きになりました。バイト先のガソリンスタンドで整備方法を教えてもらいながら夜な夜な走り回っていましたが、学生でお金もないため車両価格が安い「マイナー車」に乗らざるを得ませんでした。それでも不思議と愛着が湧くもので、今の愛車も昭和のマイナー車です。

サビ防止のため住居と離れた屋根付車庫に保管し、雨の日や夏場は極力乗らず(乗れない)、たまに週末に引っ張り出しては軽めの整備等を行っています。まさしく興味の無い方からすれば「何のための車？」と思うかもしれません。私も気軽に乗れる車に買い替えた方が楽だと思えます。しかし、今時の車では味わえない乗り味やスタイルは代えがたいものです。

普段のアシはもっぱら自転車ですが、これからも肩肘張らない程度に休日の楽しみを続けていきたいと思えます。

建築提言

建築業界の魅力を考える

日本建築士会連合会 全国青年委員長会議に参加!

日 建協は加盟組合から推薦のあった四名の建築系技術者とともに、日本建築士連合会の全国青年委員長会議に参加した。

建築士の資格は施工、設計、教育、行政と様々な立場の人が保有しており、本会議では、立場は違えど「建築業界を良くしたい」との志を持った青年建築士が全国から集まり「若者の人材不足」をテーマに議論を行った。

会議はグループ討論形式で行われたが、ほとんどのグループから建築業界内において適正な工期、イメージアップ活動、女性の活躍とハッピー

ワークが出ており、日建協の提言活動と共通している内容も多く見受けられた。

会議の最後には、各都道府県を代表する青年委員長より、若者の人材不足に対してどのような取り組みを行うか発表された。発表では、「インターネットを使い自分が建設業界でどのような働き方をしているか伝えていく」、「設計者として発注者に対して適正な工期を求め、若者が働きたいと思えるようにしていく」など、具体的な案を提示し、日建協の活動の参考となり得る内容と感じた。

本会議では、施工者、設計



者を含め、この産業に従事する全ての人が建設産業を魅力的にしたいという強い思いで一致していると感じた。